

房総における大珠の在り方（その3）

小林 清 隆

はじめに

これまでに房総から出土した大珠について、何度か紹介を行ってきている（小林2010・2012・2015）。今回は平成24（2012）年に行った集成に、追加や補正すべき資料を取り上げたい。前回の集成からは8年が経過している。その間に大珠の点数が劇的に増えた訳ではないものの、注目される資料がある。また、集成の度に房総の大珠の在り方について考えてきたが、この機会に再度整理しておくことにする。

酒々井町飯積原山遺跡（西川ほか2015）

遺跡は下総台地の中央部、印旛沼の南東側に位置し、印旛沼水系に属する鹿島川へと注ぐ高崎川に開析された台地上に展開する。遺跡の展開する台地の標高は37m～38mである。報告書は平成27年に刊行された。発掘によって旧石器時代、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺構や遺物を検出している。縄文時代では、竪穴住居68軒、炉跡76基、土坑1500基以上のほか、多数の小ピットを発掘した。竪穴住居や土坑は阿玉台式土器の後半期を伴う時期から形成され、広場を囲んで土坑が巡る環状集落が営まれる。この遺跡から2点の翡翠製大珠が出土している。

第1図1は、竪穴住居SI054から出土した大珠である。全体に比較的扁平な細長い板状を呈し、側面は面取りしたように垂直に整形されている。また、両面も研磨され平坦な状態を呈するが、下端部に向かって次第に厚さを減じている。いわゆる鯉節形の部類に含まれるであろう。穿孔位置は中央部からやや上で、中軸から右側に少し寄っている。そこは厚さが最も厚くなる位置である。穿孔方向は片側から行われている。仕上げ研磨によって孔の開口部周辺は鋭く、紐擦れの痕跡は認められない。長さ76.5mm、幅24.0mm、厚さ10.5mm、重量37.4gである。全体にうすく褐色を帯び、白濁している部分もあるので、火の熱を受けたことが考えられ、素材そのものの発色は失われている。この大珠が出土したSI054は、環状集落の広場の中心から南

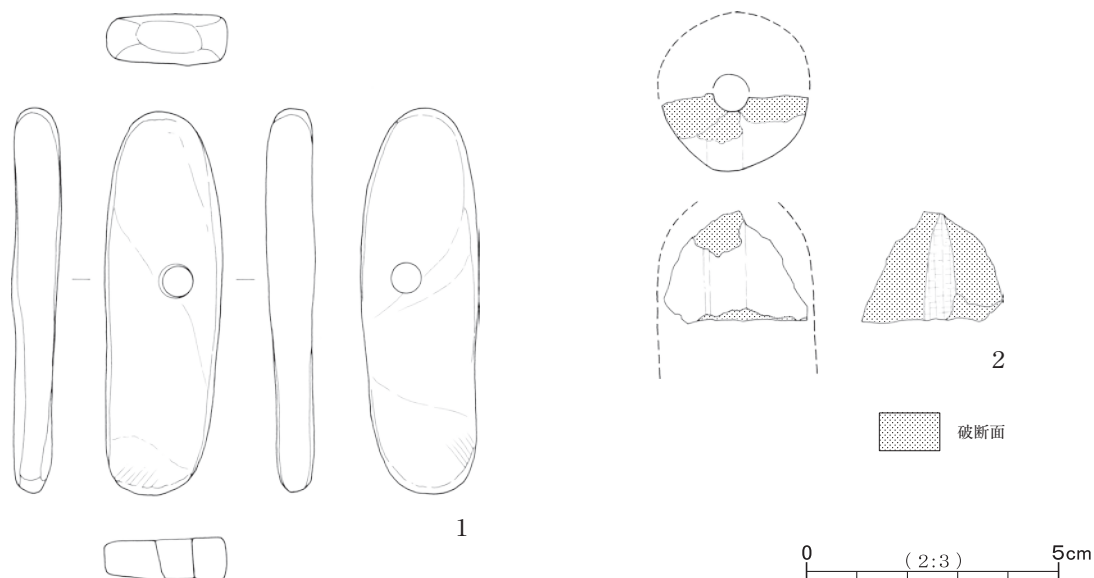
側、広場を囲む土坑帯の外側で、遺構の半分が調査区域外に含まれる。遺構の時期は加曾利E式期の前半に比定されている。具体的な出土状況は不明で、写真にも出土状況が写っていないことから、覆土中から出土したものと推測される。

第1図2は、環状集落の広場中央から見て北側の土坑帯に位置する土坑SK321から出土している。打ち割られた大珠の一部で、遺存部から推測すると、長軸方向に穿孔が行われた、いわゆる縮縮形であったと考えられる¹⁾。現状では本来の全容を想像し難いまでに壊れている。発色はややくすんでいて、破断面に調整の痕跡は認められない。土坑は直径1.5mの円形と推測され、断面はタライ状の形態を呈する。遺物は加曾利E式土器、堀之内式土器の破片が比較の数多く出土し、石鏃や石鏃未成品も出土している。断定はできないが、いずれも覆土中から出土しているものと思われる。遺構の時期は、大型の破片を根拠とすれば加曾利EⅡ式期になろう。また、本例と縮縮形で打ち割られた状態という点で共通する大珠が、千葉市有吉北貝塚から出土している（小笠原ほか1998）。

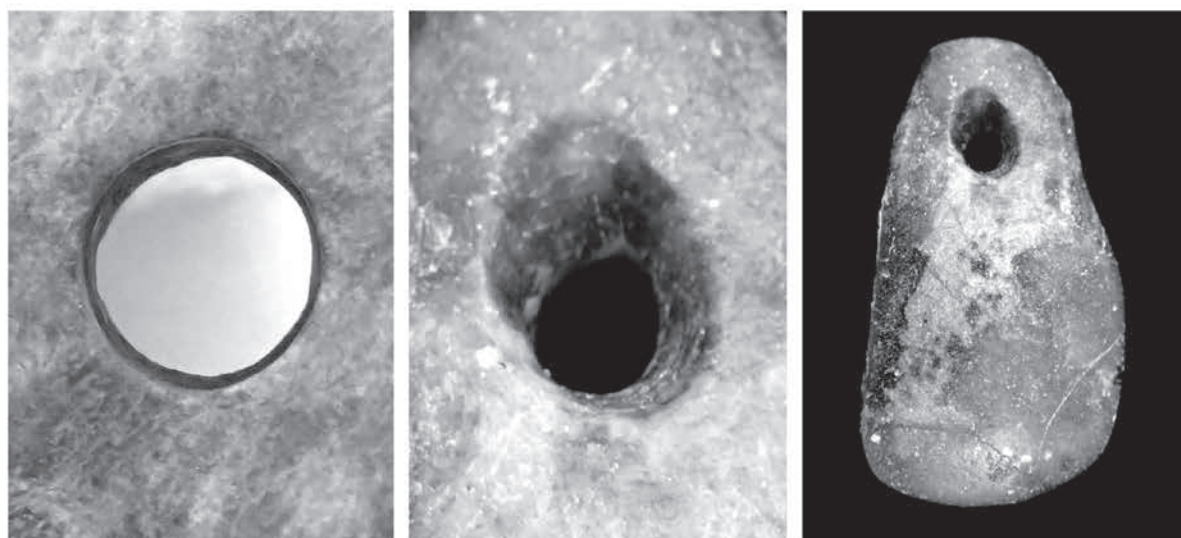
酒々井町墨古沢遺跡（横山ほか2007）

この遺跡から出土した大珠は、平成19年に報告書が刊行され、平成24年に行った集成にすでに掲載している。したがって新たに追加を必要とする資料ではない。ただ、報告書に掲載された実測図や写真を検討すると、穿孔が両側から行われていて、孔の周辺が両側とも漏斗状を呈しており、石材が翡翠という点が当時から気にかかっていた。実物を実見したところ、石材は滑石であることがわかった。今回は一覧表の石材について変更した。また、全体に油脂光沢を放ち、二次的な火の熱は受けていないとみられる。

第2図に飯積原山遺跡出土大珠と本例の孔の周辺を拡大した図を提示した。①の翡翠製では孔の周縁が鋭く真っ直ぐに穿孔され、一方本例のような滑石を用いたものは、孔の周囲から中間部に向かって両側からゆ



第1図 飯積原山遺跡出土大珠



①飯積原山遺跡出土大珠の孔の開口部

②墨古沢遺跡出土大珠の孔の開口部

③墨古沢遺跡出土大珠

第2図 飯積原山遺跡と墨古沢遺跡出土大珠

るやかな漏斗状となっている。また、孔の周辺全体が、紐の擦れというよりも研磨されたようにも見える。

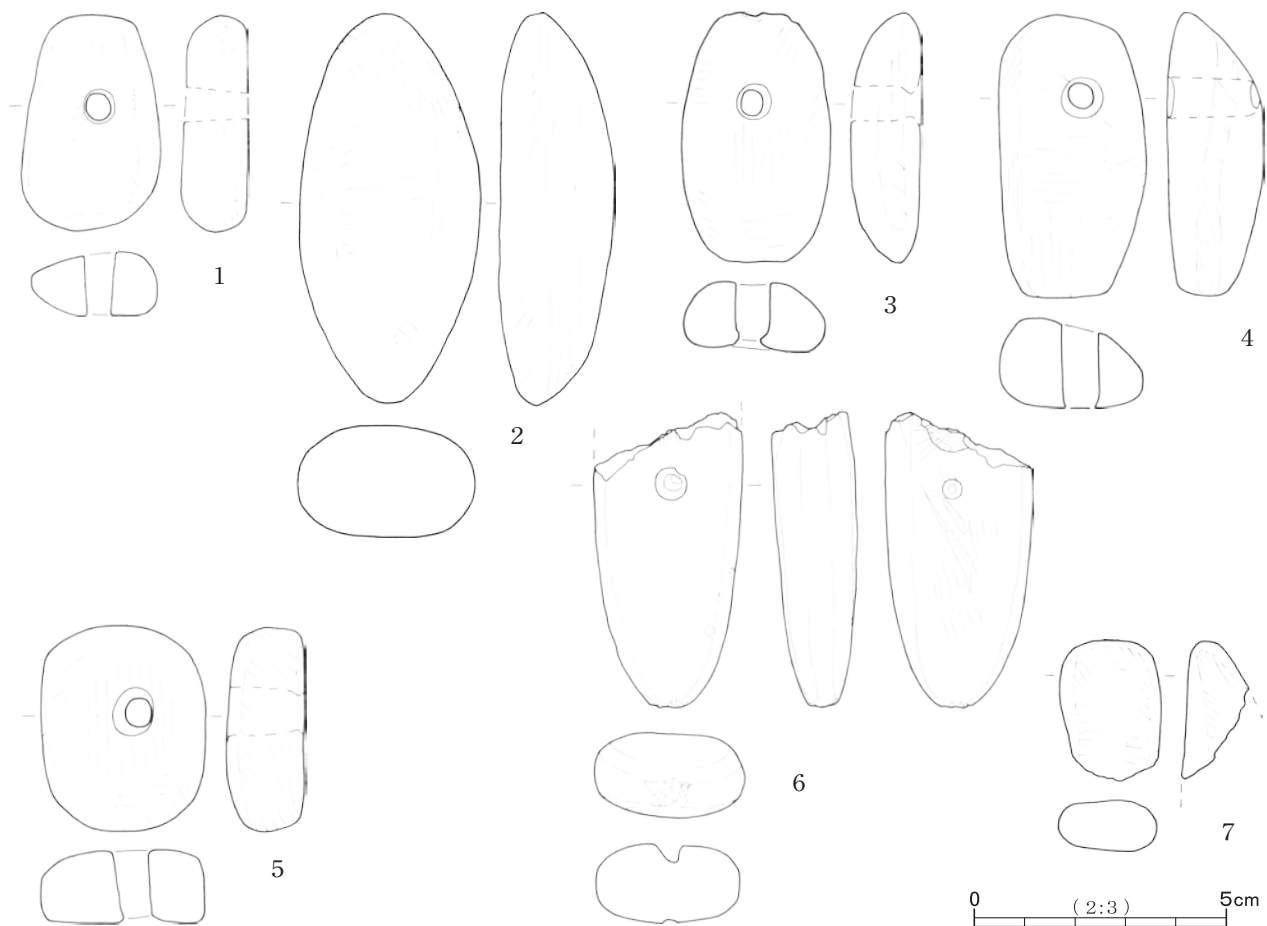
柏市小山台遺跡B区（西川ほか2019）

遺跡は下総台地の北西端部に位置する。遺跡の北側は古鬼怒湾に面する。一部未調査部分を残しているが、前期～後期に集落が形成されたことが明らかになった。特に中期には302軒を上回る竪穴住居が検出され、貯蔵穴と考えられる土坑が多数発見された。また、中期の集落は、広場を囲む土坑と、その外縁に構築された竪穴住居という典型的な下総タイプの環状集落であり、それが台地上の2か所に展開する状況がとらえられた。報告書では、遺跡の南側に位置し、継続期間の長い集

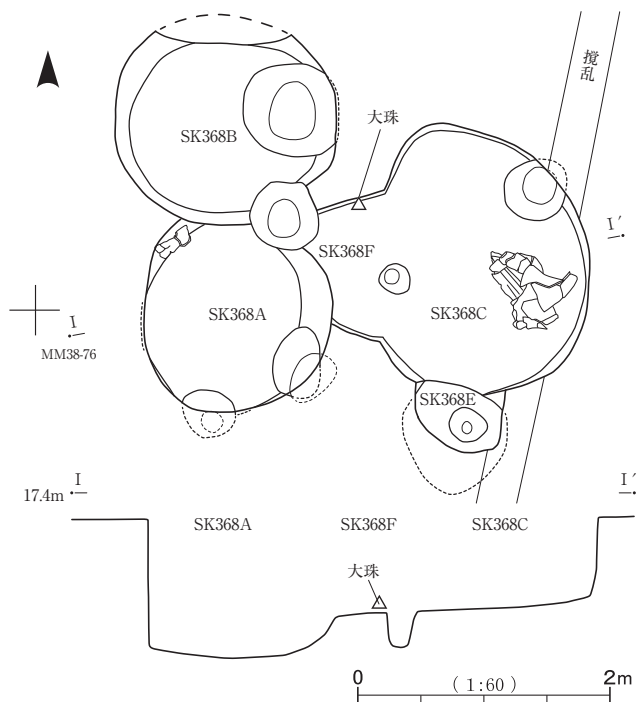
落を「環状集落Ⅰ」、北側に位置する集落を「環状集落Ⅱ」と便宜的に呼称している。この集落から翡翠製5点と翡翠以外の石材で作製された2点の、合計7点の大珠が出土している。また、垂飾や有孔石斧様の未成品、翡翠の小剥片が出土している。

第3図1～5は翡翠製大珠である。

1は全体に丁寧に研磨され、表面は曲面、裏面は平坦に仕上げられている。孔の位置は中心からやや上で、中軸から少し右に寄る。片側穿孔で、表裏の孔の開口部周縁は鋭い。全体にくすみがみられ、色調は淡緑色である。厚さは12.9mmで光を透過する。環状集落Ⅱの広場中央から見て北東に位置する竪穴住居（9）SI006から出土している。時期を決められる土器は出



第3図 小山台遺跡出土大珠

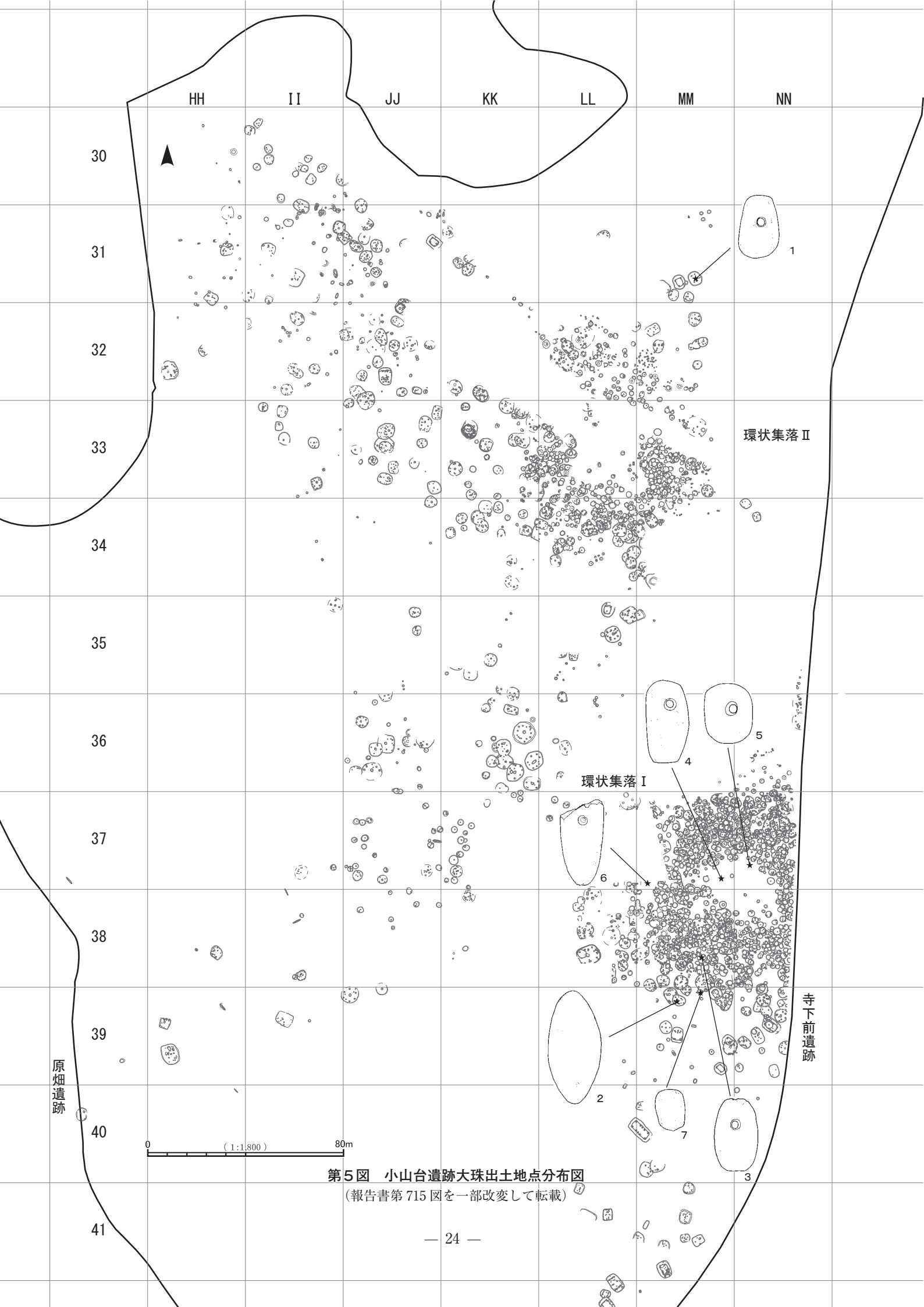


①報告書第318図を一部改変して転載



②報告書図版105から転載

第4図 小山台遺跡大珠出土状況



第5図 小山台遺跡大珠出土地点分布図
 (報告書第715図を一部改変して転載)

土しておらず、大珠は覆土中から出土している。環状集落Ⅱから出土した大珠はこの1点のみである。

2は全体に研磨を施し、木の葉形に成形する。研磨により表面側が曲面、裏面側は比較的平坦に仕上げられる。穿孔は行われておらず無穿孔の状態である。類例は少ないが、完成品と考えられる。表面に結晶が認められる部分もあるが、光の透過は弱い。黄色みを帯びた乳白色の中に、緑が所々に入る。表面の状態から被熱している可能性が高いと考えられる。出土した堅穴住居は、「環状集落Ⅰ」の広場中心から見て南西に位置する(31)SI003の覆土中から出土している²⁾。堅穴住居の時期は阿玉台Ⅳ式期に比定されている。

3は図の上部や左側面にわずかに完成後の欠損が認められるが、全体に形状が整い、裏面は平坦に研磨される。色調は淡い灰色で光を透過しない。表面状態の観察から、被熱している可能性が高い³⁾。孔の位置は中軸上で、中心からやや上部に位置する。片側穿孔とみられるが、最終段階で裏面からも穿孔しているかもしれない。環状集落の広場から南西方向に位置する土坑(36)SK368Fから出土している。周辺は遺構の重複が著しく、西側に検出されたSK368Aは加曾利EⅠ式期で、東側のSK368Cは加曾利EⅠ式後半期で、当土坑はその中間に位置し、保存状態が不良であるため本来の形状はとどめておらず、帰属する時期は不明である。そのような遺構の状態ではあるが、底面北側の壁際から出土している(第4図)²⁾。

4はやや厚めの素材を研磨により整形し、裏面を平坦に仕上げている。穿孔位置は素材の最も厚い部位に行われ、中央から上部で中軸からわずかに右に寄っている。片側穿孔で孔の開口部の周縁は鋭い状態である。発色は緑色を基調とし、部分的に斜方向に乳白色を帯びる。光の透過は比較的良い。環状集落Ⅰの広場の範囲に含まれる(36)MM37-98グリッドから、遺構に伴わない状態で出土している。

5は平面形が隅丸方形に整形され、側面も丁寧な研磨が施される。穿孔位置は中央部から少しだけ上部の位置で、中軸からわずかに右側に寄る。片側穿孔で透明度が高く、光の透過性も極めて良好で、結晶がキラキラと見える上質な翡翠である。淡い緑色と澄んだ黄色の中間的な発色である。被熱の痕跡は認められない。遺構には伴わず(36)NN37-71から出土している。

6は滑石製大珠の欠損品である。現存長は58.2mmである。完形では80mm以上の大きさで、長楕円形を呈する典型的な鏗節形であったと考えられる。欠損した破

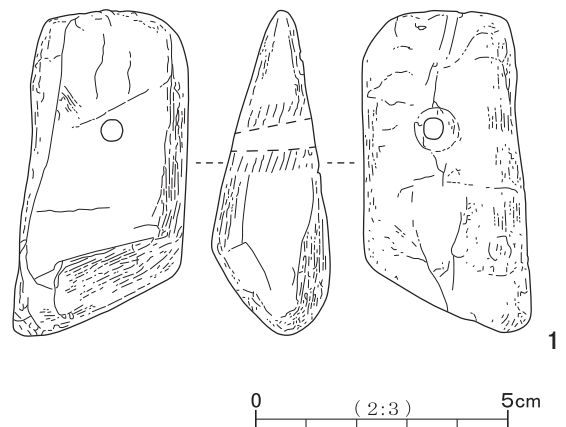
断面に元々の穿孔した孔壁の一部がみられることから、穿孔部位付近で破損したと推測できる。欠損後破損部位からやや下位に穿孔を試み、両側から行っているが、両側ともわずかに穿孔したところで終わっている。破断面に研磨は認められない。両面に後世の傷がみられる。出土した位置は、環状集落Ⅰ西側外縁部の(87)MM37-90・91で、遺構には伴っていない状態で出土している。

7は大珠の端部と考えられる。破断面の状態から加撃によって分割されたと考えられる。破断面に調整は施されず、これと接合する破片は出土していない。淡い緑色で光を透過する。肉眼では翡翠と同じような発色である。石材は、緑閃石の入った透閃石岩である。(31)MM39-06グリッドから出土した。遺存部分がわずかであり、大珠以外に垂飾の欠損品という可能性もある。

千葉市加曾利貝塚(西野・菅谷ほか2017)

明治時代から知られた貝塚で、平成29年には国の特別史跡に指定され、同年に総括報告書が刊行されている。

遺跡は古くから知られており、様々な目的による発掘が何度も行われてきた。そのため千葉市で保管してきた資料以外にも、各地の施設や個人収蔵品も存在し、総括報告書には國學院大學博物館収蔵資料が紹介されている。その中に第6図に提示した大珠がある。大きさの詳細は確認できないが、全長は6cmで翡翠製と説明されている。実測図中のスケールはこれに基づいている。出土したのは阿玉台式～加曾利EⅠ式の貝層からとのことである。なお、第6図については、総括報告書4-142図に挙げられた図を再トレースして掲載した。



第6図 加曾利貝塚出土大珠

成果について

今回は、飯積原山遺跡 2 点、小山台遺跡 B 区 7 点、加曾利貝塚 1 点の合計 10 点を集成表に加え、墨古沢遺跡の 1 点について石材の訂正を行った。

まず、特筆されるのは、小山台遺跡 B 区から出土した大珠の点数である。中期を中心にした遺跡では、これまで加曾利貝塚で 4 点の大珠が出土しており、これが県内の 1 遺跡から最も多く出土した点数になっていた。ただ、加曾利貝塚における発見の経緯は、発掘 3 点、表採 1 点で、石材では翡翠 2 点、ほかの石材 2 点という内訳である。小山台遺跡 B 区からは 7 点の大珠が発掘によって出土し、5 点が翡翠製という、加曾利貝塚を上回る点数が出土した。

小山台遺跡 B 区では、環状集落が南北 2 地点に形成され、遺構の存在しない広場が集落の継続期間維持されていることが判明した。2 か所の環状集落の広場と広場の距離は 190m 程度である。大珠は集落の継続期間が長い「環状集落 I」から 6 点、「環状集落 II」から 1 点が発見されている。遺構内から 3 点が検出されており、いずれも出土した場所は、広場から離れた外縁部に位置する竪穴住居や土坑である。竪穴住居出土の 2 点は覆土中に発見されたもので、確実に遺構に伴うという確証はない。もう 1 点が土坑から出土しており、底面付近の壁際という出土状況から考えると、遺構に伴う可能性もあると考えられる。あと 4 点については遺構には伴わない状況で検出されている。その中の 2 点は、土坑で囲まれた広場にわずかに入った位置で、もう 2 点が集落の外縁部から発見されている。

個々の帰属時期については比定が難しい。遺構の覆土中から出土した 2 点は、阿玉台 IV 式期～加曾利 E I 式期と推測されるが、覆土中からの出土であるため、確実な帰属時期を押さえ切れない。保存状態が極めて不良な土坑から出土した 1 点は、土坑に伴うにしても時期が決定できる土器が出土していないので、これも明確な帰属時期を明らかにすることができない。強い時期比定を行うと、この土坑を切って構築された 2 基の土坑が、加曾利 E I 式期なので、中峠式期～加曾利 E I 式期に土坑に入れられたと推測される。

そのほか遺構に伴わない状況で出土した 4 点の時期については、すべてが中期に帰属するとは言い切れない背景がある。なぜなら中期の環状集落に重複して堀之内式期の集落が展開するからである。そして県内では大珠の存在が、後期前葉までの例が認められるからである（小林 2017）。特に 5 については、形態が典型

的な鱗節形を呈していないことや、被熱痕跡が無いことなど、ほかの 3 点との違いが鮮明で、それが時期の違いに由来しているかもしれない。いずれにしても、遺構外出土大珠の最終的な時期の比定は、推測にすぎない。

遺跡として追加した飯積原山遺跡からは、2 点大珠が、環状集落の外縁部に位置する竪穴住居と土坑のそれぞれ覆土中から出土した。両者とも翡翠製である。集落が中期に限定されるので、帰属時期を加曾利 E 式前半期とまではいえるが、それ以上の限定を追求することは無理であろう。県内の大珠が少なからず破損状態で出土する傾向については、すでに指摘しているところであるが（小林 2010）、飯積原山遺跡のように粉々になっている例はほかにみない。有吉北貝塚出土のものも破片状態であるが、ここまでではない。ただ、2 点とも緒締形の大珠で、接合する破片が出土していない、という共通点が興味深いところである。なお、千葉県内での緒締形は数点が出土しているにすぎない。

加曾利貝塚の 1 点は実見を実施していないので、詳細は述べられない。これまで行われた部分的な調査で、この点数が出土していることから推測し、調査機会があれば、今後のさらなる資料の発見があるかもしれない。

まとめ

県内の大珠について新たに 10 点を取り上げた。無論、探索漏れや遺跡で表採し個人が所蔵している資料もあるだろう。ここで取り上げた資料は、すべてが発掘調査によって明らかになった資料という点に最大の価値がある。

追加した資料は、いずれも広場が形成され、それが維持されていく中期後半の環状集落から出土している。これまで県内の大珠の出土傾向については、「環状集落や拠点集落から出土する傾向が顕著に認められる」ことと、「遺構に伴って出土する例よりも、遺構外から出土する場合は確実に多く」存在すると指摘してきたが（小林 2010）、追加資料もそれを肯定する在り方といえる。小山台遺跡 B 区では、土坑から出土した例が 1 点存在する。土坑は本来貯蔵穴として構築されたと考えるのが妥当であり、二次的に墓坑として利用された可能性を全く否定できる訳ではない。しかし、遺構の隅から出土していることや、覆土の堆積状況が検証できないので、副葬品として墓に入れられたとは断言できない。

一方で栗島義明氏は、かねてから「環状集落の中央部空間に展開する土壙群内等からの大珠出土例が増加」しており、それらは墓に入れられた副葬品との解釈を述べている（栗島2007）。最近の栗島氏の見解にも大きな変化はみられず、「殆どが環状集落の内側空間に構築される墓域の中央部に設けられた土壙内からヒスイ製大珠が出土」しており、「集落の最も高位で重要な人物」の死に伴い副葬されたとして力説している（栗島2019）。このような見解に対して、堀越正行氏は、「翡翠製大珠の真相とその社会背景」という論文で、「玉製品が墓から出たからといって、それが即被葬者の私有財産であったという証拠にはならない」と痛烈な批判を展開し、高位とされる特別な人物による所持から墓の中までの所有という在り方を否定している（堀越2019）。

堀越氏の述べるところには同意するところが多い。千葉県状況を見渡すと、貝塚地域という特色から埋葬人骨の検出例が多いのにもかかわらず、未だ大珠を伴う人骨の発見が無く、欠損状態の大珠が多いという点をとらえても、最後まで個人に帰属してはいない、ということを確認している。

仮にある人物が所有していた期間があったとしても、常に身に付けていた装身具ではなかったことが、翡翠製大珠の孔の開口部に擦れがないことや、非翡翠製大珠の製作時の仕上げで研磨された孔の開口部の状態から察することが可能である。では、最終的にいかなる経過を辿って遺構外から出土したのであろうか。堀越氏は前掲論文で、「役割を終えた魂の宿る器物は感謝の念をもって「送り」が行われ」、大珠も送りが行われた結果、堅穴住居や土坑の覆土、発掘時には特別な地点と看做されない場所から出土すると想定している。その解釈については概ね容認するものであり、その前段階として「祭祀具として、さらに優先された社会的価値をもって機能を果たした段階があった」との想定も（小林2010）、より妥当性を高めたといえよう。今回紹介した大珠も、そのような経緯を経て遺跡に残されたと考えられる。

謝辞

今回の資料調査に際し、飯積原山遺跡、墨古沢遺跡出土大珠の実見、写真撮影、実測については、千葉県教育委員会教育振興部文化財課の加藤正信氏並びに糸原清氏にお世話になり、同課から掲載許可を頂き使用させていただきました。

注

- 1) 報告書の記載では、「鏗節型の大珠であった」と推測しているが（西川ほか 2015）、破片の状態から再考すると、鈴木克彦氏の行っている類型分類の、「縮縮形の円柱形あるいは不整形」（鈴木 2004）に相当するとみられる。
- 2) この大珠は整理作業の初期段階で、ほかの大珠と誤注記をしたかもしれない。第4図右側の3とされる大珠の出土状況写真を拡大して検討した結果、2の大珠がSK368Fから出土している可能性が高まった。現段階で検証が難しいので、報告書にしたがっておくことにした。
- 3) 上野修一氏の「被熱度レベル」（上野 2007）を参考にすると、「レベル3」か、それをやや上回る状態である。レベル3とは、「表面の光沢感や透明感が失われて、全体に細かな剥離や粉状化が顕著になる」ものが該当する。

引用・参考文献

- 上野修一 2007「焼かれた玉 - 硬玉製大珠の二次的変形 -」『日本玉文化研究会第5回シンポジウム栃木大会資料集』日本玉文化研究会
- 小笠原 永隆ほか 1998『千葉東南部ニュータウン19 - 有吉北貝塚 -』（財）千葉県文化財センター
- 栗島義明 2007「威信財流通の社会的形態 - 硬玉製大珠から探る縄文時代の交易 -」『日本玉文化研究会第5回シンポジウム栃木大会資料集』日本玉文化研究会
- 栗島義明 2019「ヒスイから見た縄文時代」『2019年度秋季企画展 海をわたったヒスイ 図録』新潟県埋蔵文化財センター
- 小林清隆 2010「房総における大珠の在り方」『房総の考古学』史館同人編
- 小林清隆 2012「千葉県出土の大珠について」『縄文時代のヒスイ大珠を巡る研究』栗島義明編
- 小林清隆 2016「房総における大珠の在り方（その2）」『玉文化研究』第2号 日本玉文化学会
- 小林清隆 2017「房総における縄文時代後晩期の石製玉類概観」『千葉縄文研究』7 千葉縄文研究会
- 鈴木克彦 2004「硬玉製大珠」『季刊 考古学』第89号（株）雄山閣
- 西川博孝ほか 2015『酒々井町飯積原山遺跡4 - 酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書 -』（公財）千葉県教育振興財団
- 西川博孝ほか 2019『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書15 - 柏市小山台遺跡B区 -』（公財）千葉県教育振興財団
- 西野雅人・菅谷通保ほか 2017『史跡加曾利貝塚総括報告書』千葉市
- 堀越正行 2019「翡翠製大珠の真相とその社会背景」『東京考古』37 東京考古談話会
- 横山 仁ほか 2007『東関東自動車道水戸線酒々井PA埋蔵文化財調査報告書4』（財）千葉県教育振興財団

第1表 千葉県出土大珠集成表

(網掛けの部分を今回追加・訂正した)

	遺跡名	遺構名	共伴遺物	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	比重	石材	穿孔 方向	備 考
1	城の腰遺跡	I28-4グリッド	阿玉台皿・IV式 ～中峠式	60.0	38.0	14.0			翡翠	片側	
2	沢の台遺跡	第4号 竪穴住居跡	加曾利EⅡ式 磨石	56.0	47.0	20.0	81.0		翡翠	不明	穿孔部から上部欠損。被断面に敲打痕跡
3	加曾利貝塚	第5調査区		45.0	45.0	47.0	200.0		翡翠	片側	
4	加曾利貝塚	表採		113.0	30.0	18.0	85.0		蛇紋岩	片側	報告書では蛇灰岩
5	加曾利貝塚	南貝塚 LVI区4G		(31.0)	(23.0)	(10.0)			翡翠	片側	欠損後被断面への加工なし
6	加曾利貝塚	第5調査区	加曾利B式～安行	51.0	18.0	14.0			不明	両側	
7	加曾利貝塚	貝層	阿玉台式～ 加曾利EⅠ式	(60.0)	(34.0)	(24.0)			翡翠	片側	國學院大學博物館所蔵
8	荒屋敷貝塚	C17グリッド	中峠式 深鉢	50.0	21.0	15.0			翡翠	両側	
9	築地台貝塚	A82グリッド		44.0	29.0	17.0			翡翠	片側	
10	有吉南貝塚	I3-80グリッド	加曾利EⅡ式	(43.0)	(24.0)		(67.0)		翡翠	片側	大型品の一部。環状貝塚の東貝層縁辺部 から出土
11	有吉北貝塚	SB190竪穴住居	加曾利EⅠ式	(42.0)	(31.0)	(24.5)	(44.3)		翡翠	片側	第348図7と同一個体の可能性あり
12	有吉北貝塚	D3-78	中峠式～加曾利E式	(28.0)	(22.4)	(14.6)	(12.6)		翡翠	片側	第348図9と同一個体の可能性あり
13	有吉北貝塚	南側斜面貝層	中峠式～加曾利E式	101.0	36.9	18.5	110.4		石英	両側	下端欠損 調整なし
14	六通貝塚	SI007 (竪穴住居)	加曾利E式末葉 黒曜石剥片	(50.4)	28.0	18.0	(29.4)		翡翠	片側	表面チョーク化し粉状縦横に穿孔
15	六通貝塚	表採		32.6	14.3	10.6	7.4		翡翠	片側	個人保管
16	堀之内貝塚	表採		87.0	34.0	20.0			翡翠	片側	翠色硬玉と観察されている
17	高根木戸貝塚	第67号住居址	加曾利EⅠ式 石鏝 敲石	64.0	33.0	20.0	85.0		翡翠	片側	
18	伊豆山台遺跡	SI044	中峠式土器 片鏝 石鏝	79.0	42.0		109.8		蛇紋岩		
19	子和清水貝塚	遺構外		(41.0)	(20.0)	(25.0)			翡翠	片側	欠損品。完形では50mm以上の大きさと推 定
20	上本郷貝塚			77.0							
21	下太田貝塚	2号獣骨	イノシシ若獣	42.0	21.0	17.0	29.0		蛇紋岩	片側	埋葬されたイノシシ若獣に伴うものか？
22	下太田貝塚	F2		32.0	16.0	90.0	7.0		蛇紋岩	両側	
23	小菅法華塚Ⅱ遺跡	グリッド		31.1	16.1	12.1	11.7		翡翠	片側	堀之内式から加曾利B式主体
24	奈土Ⅲ遺跡	表採		76.0	38.0	23.0	206.0		翡翠	片側	
25	出土遺跡不明	表採			71.0	30.0	13.5		翡翠	片側	
26	野毛平上之内遺跡	遺構外 (平安時代住戸)		51.0	18.5	14.5	21.1		翡翠	両側	裏面に断面U字型の溝
27	太田用替遺跡	表採	加曾利EⅡ式	47.0	28.0	19.0			翡翠	片側	
28	生谷松山遺跡	表採		42.0	28.0	90.0			翡翠	片側	
29	羽戸遺跡	グリッド 遺構外		(47.2)	(34.8)	(18.8)	(43.8)		翡翠	片側	表裏面剥離
30	養安寺遺跡	遺構外	阿玉台Ⅳ式 加曾利EⅠ式	(62.8)	(40.6)	(28.4)	(87.91)		翡翠	片側	3つに割れ2点が接合
31	養安寺遺跡	斜面貝層	阿玉台Ⅳ式 加曾利EⅠ式	83.0	31.0	18.5	69.90	2.69	滑石？	両側	表面乳白色の非翡翠系石材
32	大松遺跡	SI013 竪穴住居	黒浜式 諸磯a式 磨製石斧 石鏝	61.0	48.5	22.0	86.0		翡翠	片側	覆土中からの出土 遺跡の主体的時期は 中期
33	小山台遺跡	(9) SI006 竪穴住居		42.1	24.1	12.9	30.2	3.30	翡翠	片側	
34	小山台遺跡	(31) SI003 竪穴住居	(阿玉台Ⅳ式)	76.6	35.1	22.1	107.6	3.26	翡翠	無穿孔	
35	小山台遺跡	(8) SK388C 土坑	(加曾利E式前半)	48.8	29.1	13.9	32.3	2.82	翡翠	片側	灰白色、被熱
36	小山台遺跡	(8) mm37-98 グリッド		55.5	27.9	18.9	53.4	3.31	翡翠	片側	
37	小山台遺跡	(8) NN37-71 グリッド		40.2	32.6	15.2	44.4	3.35	翡翠	片側	
38	小山台遺跡	(8) mm37-90・91 グリッド		(58.2)	29.4	17.2	(43.4)	2.75	滑石	両側	欠損
39	小山台遺跡	(8) mm39-06 グリッド		(27.6)	(19.4)	(11.9)	(9.3)	2.98	透閃石岩	不明	端部の一部 淡い緑色
40	武士遺跡	008号住居跡	加曾利EⅢ式	38.0	26.0	21.0	31.1	3.24	翡翠	片側	
41	武士遺跡	表採		65.0	39.0	17.0	62.8	2.60	不明	両側	
42	武士遺跡	250号住居跡	堀之内Ⅰ式	32.0	18.0	11.0	11.1	3.29	翡翠	片側	
43	武士遺跡	415号土坑		60.5	39.5	21.0			翡翠	片側	
44	武士遺跡			41.0	16.0	7.0	19.9		滑石	両側	孔壁の研磨は丁寧でない
45	西広貝塚	S6-42		(52.0)	(40.0)	(30.0)	(98.0)		曹長石	不明	欠損品で遺存部に穿孔なし
46	祇園原貝塚	A3グリッド		82.0	35.0	28.0	118.7		翡翠	片側	
47	祇園原貝塚	不明		40.0	38.0	23.8	23.8		玄武岩	両側	
48	草刈貝塚	C88-12グリッド	阿玉台式～ 加曾利EⅡ式	55.0	34.0	28.0	108.0		翡翠	片側	
49	草刈貝塚	56トレンチ内	阿玉台式～ 加曾利EⅡ式	68.0	36.0	20.0	108.0		翡翠	片側	
50	中野久木谷頭遺跡	SK021 土坑		50.0	26.0	11.0	20.9		翡翠	片側	遺跡の主体時期は中期
51	中野久木谷頭遺跡	表採		(24.0)	(21.0)	(7.0)	(6.29)		蛇紋岩	両側	頭部付近で欠損。大型品の可能性あり
52	中野久木谷頭遺跡	C地点		36.0	28.0	20.0			翡翠		
53	三輪野山遺跡										欠損
54	中沢貝塚										端部欠損

(網掛けの部分を今回追加・訂正した)

	遺跡名	遺構名	共伴遺物	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	比重	石材	穿孔 方向	備 考
55	三直貝塚	5D-02グリッド	阿玉台式～ 安行3c式	41.0	21.0	7.8	13.4		翡翠	片側	
56	三直貝塚	4E-64グリッド	堀之内2式～ 安行3c式	(39.9)	(8.6)	(9.7)	(4.5)		不明	片側	黒色を呈し、光沢をもつ
57	寺ノ代遺跡	7D-02グリッド		(33.6)	(15.8)	(10.6)	(7.27)		滑石	両側	
58	深名瀬島遺跡	B6cグリッド		47.0	26.0	12.0				片側	
59	深名瀬島遺跡	第26号住居	加曾利EⅡ式 石鏝	40.1	33.5	11.5				片側	
60	片野遺跡			93.0	36.0	21.0			翡翠	片側	
61	向油田貝塚		阿玉台式～ 加曾利EⅠ式	(61.0)	(41.0)				玉髓	片側	
62	白井通路貝塚	表採		55.0	35.0	25.0			チャート質	不明	縦方向・横方向に穿孔 千葉県史にカラー 図版掲載
63	宮前遺跡?	表採		111.0	36.0	25.0	206.0		蛇紋岩	片側	上下端部摩滅。磨石として使用?
64	磯花遺跡								翡翠		
65	阿玉台貝塚			(60.0)	(27.0)	(14.0)			滑石	両側	報告では大理石。昭和32年江坂輝弥氏論 文で翡翠
66	墨古沢遺跡	第1遺物 集中地点	阿玉台式～ 加曾利EⅠ式前半主体	58.8	33.1	9.6	47.8		滑石	両側	報告書では翡翠
67	飯積原山遺跡	SI054 竪穴住居	加曾利EⅠ式前半	76.5	24.0	10.5	37.40		翡翠	片側	
68	飯積原山遺跡						(9.50)		翡翠		
69	東長山野遺跡	D18-3		53.0	23.0	10.0	21.6		翡翠系	両側	報告書では「ヒスイではないヒスイ系の 石材」